報告
report

福岡市緑の基本計画の新たな課題

岡本　均
西日本短期大学教授

A preliminary consideration to the next master plan of park system /open space in Fukuoka city

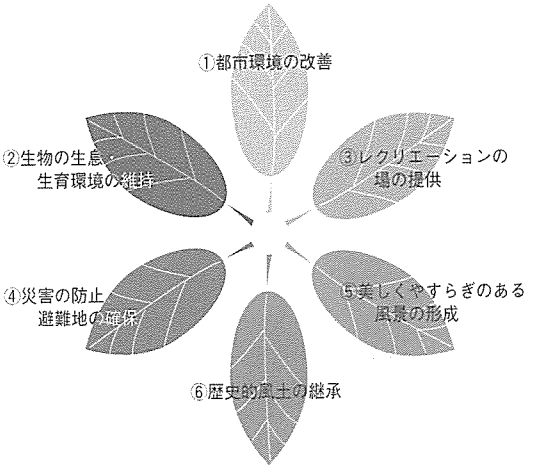
はじめに

今日、都市を悩ましている環境問題の主要なキイ―ワードである、地球温暖化やヒートアイランドは、大学や研究所の研究課題やマスコミの話題上の問題だけではなくなり、市民が日常生活の上で直接的にその弊害を体感できる現象となり、これらの解決策を探ることが、都市の重要な政策課題一つであると認識されつつある。

その解決策の一つとして、緑の総合的な役割が改めて認識されるようになって久しいが、一方その効率を評価するための新たな緑の機能主義に陥る危険性も孕んでいる。元々食物連鎖の頂点にある人間のみが他の生き物と隔絶して集合している都市は、生態系の視点からは異常であり、その代償として、水準の高い自然との連携を強める手法や仕掛けの必要が望まれるのは当然である。水準が高いという意味は、緑のもつ総合的な機能を生かしたやさしい風景を持つまちづくりもその一つである。良い風景の下には、人々の落ち着いた生活と、しっかりとした産業が定着していることを経験的に世界の都市にその例を見ることが出来る。良い風景を作ることは、政府が提唱している観光立国にもつながることとなる。風景の構成要素としての緑の役割は重要である。このような観点から、福岡市のみどりの基本計画の新たな視座を論じるものである。緑が植物を指す場合や緑を基調としたオープンスペースを指す場合があるが本稿においては厳密に使い分けていない。

福岡市緑の基本計画の使命

今日まで、シビルミニマム論的都市整備の中で捉えられ、面としての緑の機能論を展開するに留まっていた、都市の緑の重要なテーマは量から質へと移り変わりつつあり、環境全般に渡る緑の多機能を多元的に生かす時期にきているといえる。一例として水田や森林の評価が経済性を優先した生産性のみの尺度から、水源涵養や景観の機能を組み込む評価にシフトしてきたことは、今後益々加速される必要があり、環境全般にわたるLCA (life cycle assessment) に繋いでいくことが肝要であろう。それらの解決には、ひとつの目的のために最も効率的なひとつの解決方法ではなく、多様性、多機能を融合した型の、あるいは、お互いが補完し合いながら初期の目的を可能ならしめる手法の採用が今後望まれる。幸いに福岡市は、市街地をコアとして、三方を山に一方を海にと身近に自然環境を包含している都市である。このような立地から「福岡市緑の基本計画」では、都市における緑の役割を６機能に整理し、中でもヒートアイランドに対応いて、市域の中をほぼ南北に縦断する風の道や、生物生息域の確保による共生の補完とするためのビオトープネットワークの形成を基調とした緑のネットワークを提唱しているが、今後の緑の基本計画の根幹的使命は、緑の量や都市のしつらえとしての緑ではなく、生活インフラ、観光インフラとして、多様で多機能な緑を基調としたシステムを稼動させることで、新しい福岡の街づくりの方向の重要な柱として位置づけられることにあると考えられなければならないだろう。



緑の６つの役割